九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

明治大学情報コミュニケーション学部「マスコミュニケーション論 A」（3 年生以上）授業実践報告

永井, 健太郎
明治大学情報コミュニケーション学部 : 助教

https://hdl.handle.net/2324/6632431

出版情報：オンライン授業の地平 : 2020年度の実践報告, pp.77-77, 2021-04-30. 雷音学術出版
バージョン：
権利関係：(C) 2021 The Author(s).

明治大学情報コミュニケーション学部「マスコミュニケーション論 A」(3 年生以上)授業実践報告

永井健太郎

1. 授業の目的と概要、授業内容、成績評価の方法等

本講義は、マスコミュニケーション研究の理論枠組みとその歴史的な展開を解説する。マスコミュニケーション研究で提示されてきた様々な仮説や理論を学ぶことを通して、学生に情報社会を生き抜く上で必要なメディアリテラシーを身につけてもらうことが目的である。前半では、初期のメディアの強力効果論を、当時の様々な事件や出来事などに言及しながら解説する。後半では，テレビの普及とともに登場した新効果論研究の発展と展開を解説する。

本学は早々にオンライン化に舵を切るとともに、足りない講義数を補うために、動画配信を推奨した。そのため、本講義では、12 回から 14 回の 3 回の講義を、先に収録した。その後、全授業オンライン形式に移行し、第 1 回のイントロダクションから、収録していく形になった。

講義の収録は主に Zoom を用いて行った。各講義を 20 分程度のパートに分割し、4～5 パートで収録した。はじめに補講分として収録した講義動画は、60 分ほどの動画 1 本に収めてしまった。ダウンロード式でないため、学生が視聴を再開する時などに、データ通信量がかかる。そこで、経済的な負担をかけないために分割して収録するようにした。講義で使用した PowerPoint は別途アップし自由に閲覧できるようにした。

成績評価は、講義動画を視聴したうえで提出するリアクションペーパー(以下、RP)、中間レポート、期末レポートで評価した。RP は、対面の授業でも行っているものであるが、オンラインでも同様に行った。レポートに関しては、オンライン化の影響はほぼなかったが、RP では回答内容が明らかに充実したものとなった。本来は講義中に記入させていたものであったため、記入する時間が確保されていなかったと考えられる。一方で、オンライン化したことで、講義内容を吟味したうえで記入する時間が確保できたと考えられる。

2. 今後の課題・可能性、もしくは受講生の反応等

本講義で学生から評価を受けた点は、RP への返答と板書である。RP にあがった疑問や質問に関して、個別に返答した。また、追加の説明が必要だと判断した点については、補足の解説動画をアップした。こういった教員側からの返答は、学生に好評であった。学生からは「理解が深まった」という評価が寄せられた。学生の課題に返答をしない場合、教員が課題をチェックしているのかどうかが掴めず、学生側に徒労感が募り、講義への不満として表出するケースが報告されている。学生とのコミュニケーションを図ることが、オンライン授業の理解度を上げるヒントとなるだろう。

ただし、欠点もある。本講義は 100 人を超える履修者であったため、予想以上に時間を取られることとなった。すべての RP を確認し、採点、少数ではあるが返答のコメントを作成する。これを複数講義で実施することは、教員の負担増になる。学生の学習に寄与することが当然求められるが、課題を充実させることは、結果として学生だけでなく教員の負担増に繋がることには注意しなければならないだろう。

PowerPoint のスライドのみでなく、板書するという行為も、学生に評価された。自室に用意した B3 程度のホワイトボードに、文字だけではわかりにくい点を、概念図などを板書しつつ解説を行った。学生からは「板書でのまとめで理解が深まった」というコメントが寄せられた。レジュメやスライドの映像と音声のみの動画よりも、複数のタイプを用いることで学生の理解を深められることがわかった。今後もこれらの形式を併用していく予定である。